

A～D のうち、任意の 2 問を選び、それぞれの指示に従って解答しなさい。

※解答用紙は、各問 1 枚ずつ使用すること。

※それぞれの解答用紙に、学籍番号・氏名・選択した問題の記号(ABCD)・出題講師名を記入すること。

※1 問しか解答できない場合も、解答用紙は 2 枚を切り離さずに提出すること。

A (家本・渡辺講師出題)

次の両方の質問に答えなさい

- ① 気候変動対策におけるコベネフィットの有用性について、具体的な事例も含め、論じなさい。(文字数制限約 1,000 文字程度以内)
- ② コベネフィットを促進するために効果的と思われる取組について、自身の考えを述べなさい。(文字数制限約 500 文字程度以内)

B (森講師出題)

SDGs の進展に伴い、各産業分野でもサステナビリティへの取り組みが必須となっている。観光においては、国連が 2005 年にサステナブルツーリズムを「現在と将来の経済的、社会的、環境的な影響を熟慮しながら、訪問客並びに、産業、環境、そして観光の受け入れ側コミュニティのニーズに対処する観光」(日本語訳・日本エコツーリズムセンター)と定義し、日本でも 2020 年に「日本版持続可能な観光ガイドライン (JSTS-D)」を策定、持続可能な観光政策が進められている。また COVID-19 による制約が世界的に解かれる中、世界の観光客数は 2019 年前の水準を超える見通しまで回復してきている。

今後世界的に観光のサステナビリティを高めていくには、オーバーツーリズム対策だけでなく、どのような主体がどんな方策をとっていくか、また何がポイントとなるかあなたの考えを論じなさい。

C (川村講師出題)

持続可能な社会の構築に向けて、NGO、企業、行政機関など異なるセクターの協力関係がなぜ必要なのか、また異セクターに属する組織が協力しあうときにどのようなことを重視すべきか論じなさい。回答にあたっては具体的な事例をあげ、パートナーシップを築いたアクター同士の関係を示してください。

D (日比・山ノ下講師出題)

以下の二つのキーワード群（A群、B群）それぞれから最低2つずつキーワードを選び、合わせて5つ以上のキーワードを使って、生物多様性と社会/経済/生活との関わりについて、具体的な事例（自身の個人的な経験であればなお良し）を交えて記述せよ。

A群：生態系サービス、生物多様性、自然資本、SDGs、持続可能、貧困、途上国、産業革命、人権、健康、水、自然災害、気候変動、将来世代、食料、価値、供給、調整、文化、人口増加、生計手段

B群：企業、消費者、サプライチェーン、NGO、パームオイル、コーヒー、エビの養殖、牛肉生産、森林破壊、原材料、絶滅危惧種、マングローブ、エコツーリズム、エシカル、農業、石炭火力、日本、日常生活、カーボン、ライフスタイル

2024 年度 環境政策論Ⅱ 学期末試験講評（森 高一）

授業時に強調した点であるが、サステナブルツーリズムにおける地域コミュニティの重要性についてはほぼ全員が言及しており、地域資源の活用や高付加価値化、地域住民や事業者の参画を重視する論考が多かった。SDGs の社会的浸透によるものにとらえているが、観光産業のみならずカーボンニュートラルの視点、インフラや交通についての言及もあり、学生の多くがサステナビリティを多角的また世界基準でとらえていることがわかる。

地域コミュニティのステークホルダーとしての重視では、一方で観光に限らず地域の持続性をいかに実現するか、ルール化や取り組みの実行も必要との指摘があり、加えて観光に資する魅力の高め方ができるかをはじめ、ESD や教育の充実へも言及するものもあった。ここは高く評価できる。

観光事業者や地域コミュニティだけでなく、国や国際機関の関りも多く述べられている。法的規制やルール作りの必要性が多かったが、国や規制の過度の依存には疑問を呈する論考もあり、対話とコミュニケーションの重要性を論ずるものもあった。また旅行者の質に言及するものもあり、これも大事なポイントである。

まだ具体的な取り組みや成功事例が知られるには至っていないが、サステナブルツーリズムの概念的な整理はおおむねできているととらえる。今後は実例をより多く学び、その持続性について関心を高めていくことを期待する。

2024 年度 学習院大学 環境政策論 II 試験

講評（川村研治担当分）

川村の出題に応じた答案が 42 あり、採点の結果、秀 2 名、優 4 名、良 14 名、可 9 名、不可 13 名であった。

採点は以下のポイントによった。

1. 環境パートナーシップの基本的な理解

環境パートナーシップが必要とされる理由、環境パートナーシップがどのようなものであるかなどを、3 つの社会セクターの特性についての言及を含めて説明しているか。

2. 環境パートナーシップの具体例

授業で取り上げた事例や自分が知っている事例を挙げて、それぞれのアクターが果たした役割を説明しているか。

3. 環境パートナーシップを形成するにあたって留意すべき事柄

各社会セクターの特性や環境パートナーシップの歴史的変遷を踏まえて留意点を説明しているか。

4. SDGs 及びパリ協定以降の環境パートナーシップの変化

SDGs 及びパリ協定以降、環境パートナーシップの意義・重要性が変化していることを説明しているか。

1 と 2 を的確に説明してあれば可以上、1、2 を踏まえさらに 3 か 4 について言及したものは優か秀をつけた。学生諸君の想定と異なった（ヤマがはずれた）ためであろうか、出題意図と外れた答案が見られたのは残念だった。一方、環境 NGO の存在意義や環境パートナーシップの歴史を理解し、自分の言葉で論じた者もいて大いに励みとなった。真摯に授業と向き合ってくれたことに対してお礼を申し上げる。

今年度の試験の課題は、「生物多様性と社会/経済/生活との関わりを記述する」ことでした。つまり、私たちの日々の暮らしがどのように生物多様性に悪影響を及ぼしているのかを考えることでした。答案では対策（解決策）のみを記述しているものが多くみられました。しかし、まず生物多様性に対する悪影響がなぜ、どのように生じているのかをよく検討しなければ、有効な解決策を見つけることができません。

私の講義では、日本から遠く離れた熱帯の森林減少が気候変動や生物多様性に深刻な悪影響を及ぼしていることについてお話ししました。熱帯林減少の大きな原因の一つは、森林が農地に転用されること、そして、その農地で生産される作物（コーヒーやパーム油、カカオなど）が日本をはじめとした先進国に輸出され消費されていることから、私たちの生活は、農作物の輸入サプライチェーンを通じて、熱帯諸国の生物多様性に影響を及ぼしていることになります。このような問題を一消費者の行動で即座に変えるのは難しいことです。しかし、気候変動、生物多様性劣化の問題は、皆さんや皆さんの子供という将来世代に深刻な影響をもたらすことになります。これから皆さんが日常の様々な選択をしていく中で、気候変動や生物多様性影響を判断基準や価値基準の一つに追加していただければと思います。